

原典史料紹介：ドゥッチオ・ディ・アマドーレの
『聖帯：Cincturale』

金原由紀子

A Study and Translation of the 'Cincturale' of Duccio di Amadore

KANEHARA Yukiko

Abstract

At the Pieve of Santo Stefano in Prato, Italy, the cult of the Vergin and her Sacred Belt became popular from the third quarter of the thirteenth century and "Historia" was edited by the canonry to prove the history and authenticity of the relic. Under the "Historia", the subject of <<Assumption of the Vergin in the giving the Belt to Thomas>> was often painted and sculpted at the Pieve. In 1340, a master of Latin grammar employed by the Prato government, Duccio di Amadore, wrote "Cincturale", another version of the history. It is characterized by some descriptions which suggests the stand of the government of the period. I am convinced that this translation of "Cincturale" is significant to understand how the government simbolized the Sacred Belt and to clarify the relationship between the cult of the relic and the art works at the Pieve of Santo Stefano.

Key word: Prato, Sacred Belt, Duccio di Amadore, Cincturale

[要約]

中部イタリアの小都市プラートのサント・ステファノ聖堂には、聖母が被昇天の際に使徒トマスに与えた帯が12世紀末に寄進されたと伝えられる。この帯の聖遺物崇拝すなわち聖帯崇拝は13世紀第3四半世紀より盛んになり、同聖堂では《聖母被昇天と使徒トマスへの聖帯の授与》の主題が頻繁に造形化された。その際、典拠として重要な役割を果たしたのが、聖帯の由来を物語るテキストである。最古の『聖帯の歴史』は、13世紀第3四半世紀頃にサント・ステファノ聖堂参事会により編纂された。だが1340年には、今度はコムーネの文法教師ドゥッチオ・ディ・アマドーレが『聖帯』を執筆した。この『聖帯』は、コムーネ側の人物によって執筆され、当時のコムーネの政治的立場を表明する記述が随所に見られるという点で特異である。1340年頃にコムーネ政府が聖帯をどのように位置づけていたかを知り、聖帯崇拝と美術の関係を解明する一助とするために、本稿では『聖帯』の邦訳を試みる。

キーワード：プラート、聖母の帯、ドゥッチオ・ディ・アマドーレ、聖帯

中部イタリアの小都市プラートのサント・ステファノ聖堂には、聖母が被昇天の際に使徒トマスに与えたという帯の聖遺物が12世紀末に寄進されたと伝えられる。この帯の聖遺物崇拝すなわち聖帯崇拝は、13世紀第3四半世紀より盛んになり、同聖堂では13世紀末から15世紀にかけて《聖母被昇天と使徒トマスへの聖帯の授与》の主題が絵画・彫刻・ステンドグラスとして頻りに造形化された¹。その際に、聖帯崇拝の普及および造形作品の典拠として重要な役割を果たしたのが、聖帯の由来を物語る伝説のテキストである。最古のテキスト『聖帯の歴史』は、13世紀第3四半世紀頃にサント・ステファノ聖堂参事会により編纂され²、聖帯の伝説は新しく起きた奇蹟をこの『聖帯の歴史』に書き加えていくという形で発展した。だが、1340年に、今度はコムーネの文法教師ドゥッチオ・ディ・アマドーレが新たに『聖帯 Cincturale』³を執筆した。この『聖帯』は、奇蹟の起きた順番に厳密に留意しないまま既存のテキストを編纂し、まず聖帯による1つの新しい奇蹟、次に10の古い奇蹟を語り、続いて聖母の死と被昇天と聖帯の授与の物語、聖帯のプラートへの到着の物語、6の最も古い奇蹟をラテン詩のディスティコス形式で詠っている⁴。『聖帯』は、聖堂参事会ではなくコムーネ側の人物によって執筆され、当時のコムーネの政治的立場を表明する記述が随所に見られるという点で、他の版のテキストとは明らかに異質である。『聖帯の歴史』との相違点については、紙数に限りがあるため改めて別の機会に論じることとしたいが、1340年頃にコムーネ政府が聖帯というプラートの宝物をどのように位置づけていたかを知り、聖帯崇拝と美術の関係を解明する一助とするために、本稿では『聖帯』の邦訳を試みる。なお、【 】内に訳者註を付した。

*

*

*

『聖帯』

我らが主イエス・キリストの御名において、この著作は優れた人物で文法に精通したプラートの教師ドゥッチオにより、聖母の栄光と高貴な帯に敬意を表し、主の年1340年に世に出された。ここに何が記されているかを知りたい者は、この小さな書物が、天からのある贈物について記したものであることを知りたまえ。どこで、どのような、何が、といったことはこの頌詩で明らかにされるが、頌詩の最後の部分を冒頭にもってくるつもりである。つまり、奇蹟を最初に記し、通常は初めに語る聖帯の伝説を後におく。歴史が告げているように、全能の神は既に多くの奇蹟を聖帯を通じて現わされた。だが私は、我らの時代に輝いた偉大な奇蹟を、控えめな響きの頌詩として叙述する。今の時代と古い時代が記憶した多くのことを、気高い歴史を、私は唱っていくだろう。神よ、その母よ、あなた方がなされたことを語ることを許し、私の慎ましい詩の道が気に入っていただけるよう力をお貸し下さい。プラートの民よ、星々の上にお座りになる神の母の魂がプラートに置くことをお決めになった聖帯の栄光が、少なく、短く記されることにより、いくらかの無気力が占めるといふのならば、あなたが無気力をふり払い、称賛に値する榮譽を集め、敬虔な人々のために信心深い模範となりなさい。少なくとも、これらの模範に正當に倣い、忠実な心を受け入れなさい。

『取れかかっていたが独りでの補強された帯の結び目についての最近の奇蹟。この作品の冒頭部』。

神の聖なる母はかつて、【キリストの復活を】信じるようにとキリストが露わにした腹を手で触れることを許した使徒トマスに⁵、現在はプラートの教会が保管する帯をお渡しになった。この帯は毎年2度顕示され、まず復活祭に、続いて聖母の誕生の祝日⁶にと決まっている。その際には、偉大な信仰が、素晴らしい贈り物を見ようとする大勢の群衆を集める。だが、平常時以外に帯が解かれて結ばれた時に、徳を賞賛され、正義、敬虔な生活、信頼といった長所を持つ司教バロント⁷、立ち会った聖堂参事会員と聖職者たち、この民を治める権威者により、帯の一部が傷んでいるのが見つかった。各々が驚きをもって帯を眺め、立ち会った者たちの口に大きなざわめきが広がったことに気づいた。垂れ下がる帯に、小さな飾り房がたった1本の糸でつながっていたからである。なぜゆえに？ ある者がそれをちぎろうとしたが、それを傷つけたために、取り去ることが許されなかったからである。飾り房は、修繕されなければすぐにも落ちてしまいそうに見えた。それを見た者は次のように言い、次のように考えた。「何年もの間、飾り房はこのような状態にあったが、補強しないと落ちてしまうだろう」。帯の先端は何本かに分かれており、帯本体の中央は丈夫になっていた。小さな飾り房というのは、【聖母の】卓越した手で飾り房の形にそこに作られた結び目である。プラートの統治者たちは次のような話をして、帯のために行うべき計画を立てた。統治者と聖職者は、帯を修繕し、そのためには針やあらゆる材料を惜しむべきではないと決めた。王の代理人⁸、統治者、当地の聖堂参事会員だけがこの作業に立ち会うべしとされた。計画は同意され、日時と適当な条件の材料と役割分担について決めた。他の者たちに知られることのないよう夜間に集合した。彼らは調和のとれた色で縫うべく、そしてほつれそうな部分を手で補強すべく、様々な色の絹糸を持ってきた。神が聖なる物をお導きになるのだから、当然、すべての人の手はそれに触れることを恐れなければならない。確かにこの時、聖母の魂とキリストは人の手で縫うことをお許しにならず、ご自分の力で補強なさるという驚くべき、感嘆すべきことを行われたのだ。次のことが起きた。すなわち、聖母の帯が広げられ、裁縫師が絹糸を持って針を準備している間、他の者がたった1本の糸でつながっているように見える飾り房が垂れ下がっているひもはどれかと調べていた。そして、彼らが視線を止めて、発見されたほころびがあらわになるよう手で裏返すと、ほころびがなく、頑丈で、汚れた部分もなく、状態も大きさも全く損なわれていないことが明らかになったのである。帯が以前と異なることは明らかだったため、驚いた聖職者と俗人たちは主を称えた。そして、ご自分の物への関心を持ち続け、極めて高貴な母の物が人間の手を必要とすることを許さなかったキリストに感謝を捧げた。彼に称賛と栄光、歓呼が常にあるように。そして、彼の恩寵が我らを天の住人として下さるように。神のこの敬虔な出来事は、1338年の聖者の祝日⁹の翌日の昼に燦然と煌めくがごとく起きた。プラートの教会の司祭長が空位で¹⁰、プラートが恵まれた王ロベルトの統治下にあり、この君主のお陰で平和であった時期に。そこには、コムーネの美しく高い開廊を建設させた有能な男、代理人アッチャイウオリ¹¹が立ち会っていた。

『昔の奇蹟について。最初に、敵の襲撃からのプラートの町の解放について』。

この最近の奇蹟は、人々が真実を語りながら思い起こす多くの奇蹟を、また、我々自身が今の時代に目撃する多くの奇蹟を記すよう私を駆り立てる。この主題は才能と気高い文体を持つ詩人を必要としているかもしれないが、私は主題そのものが失われないように書き残すことに関心があるのだ。昔の人は、近隣の民¹²がかつてプラートを攻撃し、その不和の原因は、多大な労力と費用をかけて建設した町を囲む高い城壁を少し前に破壊しようとしたことだったと語った。強力な民は弱い民を頻繁に攻撃し、要塞化した本拠地を利用することを許さなかった。どのような防衛措置によってその短気で強力な民に抵抗することができたのかと問うならば、話をさかのぼって語ろう。敵を非常に恐れたプラートの人々は、ルッカと同盟し、それから城壁を建設した。ルッカの民が強力な軍隊で建設を保護したので、プラート人は『プラートの城壁を損なう者は、ルッカの城壁に手出ししたものとみなすべし』という法を制定し、彼らの血の混じった城壁を神聖なものとした。その当時、キリスト教徒にとって致命的な不幸となる教皇派も皇帝派もまだ存在しなかった。感情を鎮めることで不和を解消すべき平和な時期に、あの強い民が城壁の周囲へ、多くの戦闘が密かに起きていたことに油断していたプラート人の周囲へ来ると、兵力と武器の点で敵に劣るプラートの民は自らの武力を調べて唖然とした。彼らはキリストの温情を堅く信じて聡明にも神の武器のところへと急ぎ、キリストに、そして真っ赤な血で染まった石により殉教聖者に最初の道を開き、キリストが守護聖者として選んだ聖ステファノ¹³に、そしてプラートの民の女主人である聖母に祈りを捧げた。それから、聖帯が城壁をお守り下さるように、それを城壁の上に置くことを急いで決めた。聖帯を高い城壁の上に持って行った途端、それを見た敵たちはまるで矢が天から背中にに向けて放たれたかのように、強い人々が彼らを追跡しているかのように混乱して逃げた。自分たちの方へ向きを変えて逃げようとして大混乱になり、必死で家へ帰ろうとした。その時、白い衣を身にまとった美しく見慣れない兵士が教会から出てきて、敵の軍隊と武器に向かって1人で突撃したと噂が伝えている。その輝きは、死すべき運命を負う人間の目に恐怖を与えた。彼の姿を見ると敵は戦利品を捨てて逃げ、いつもとは違う道を進んでいった。すると、神の贈物と保護によって守られた弱い民は敵から解放された。それ以降、武力において優位な民は城壁を平穩に使用することをプラートに許し、怒りを静めたのである。

『聖帯を盗んだものの、立ち去ることができなかった聖堂参事会員ゲラルドについて』。

かつて、栄えた都市フィレンツェ出身のゲラルドという聖堂参事会員¹⁴が、多くの人々の祈りのためにあるいは単に生地への郷土愛に動かされて、彼の故郷が帯を享受するよう神の高貴な物をその地に置きたいと熱望した。ある真夜中、誰もおらず、教会のすべての人々が眠りに落ちている時に、彼は起きて、帯を掴んだ。そして、それを持って忍び足で歩き、急いだ。長い間急いで歩いたので、外へ出ただろうと考えた。後を追う者がいなかったため既に外にいてと思っていたのだが、実際はまだ中にいた。扉の向こうに出ることができず、中で回っていたのである。彼は回り続け、歩き回ったために両脚が疲れてしまった。鐘が次の

日の到来を告げると、その鐘の音が不意に彼を襲い、彼は唾然とした。その音で我に返り、自分が鐘楼の中にいることに気づいたのである。彼は盗みを1度だけではなく3度も試みたのだが、キリストは同じように彼の歩行を妨げた。彼は悪事を心から嘆いて後悔し、聖帯を祭壇に戻した。そして、厚かましくも司祭に罪を告白し、自分の死後にそのことを公表するように命じた。だが、彼の同僚は誰もこのような悪事を敢えて行わなかった。司祭は聖帯を3つの鍵で保管することを決め、1つはコムーネの記録保管所が、もう1つは司祭長が、3つ目は聖堂参事会員が保管した。

『混血の男による聖帯の盗難未遂について』¹⁵。

しかし、ある混血の男が、似たような野心によってではなく、単なる金銭報酬を目標に同様の罪への狂気に駆られた。彼はある夜、盗みに使うための沢山の鉄製の道具を持って教会へ入り、聖所を冒瀆した。祭壇を壊してその聖遺物を手に入れたが、持ち去ろうとしても外へ出ることができなかった。その罪が彼を盲目にしたので、扉と出口を見つけることができず、寝ていた教会の管理人を呼んだ。管理人が同郷人だったので、彼の心を信じたのである。事情を話したが、彼が司祭たちと方策を講じている間に回廊で騒ぎが起きた。人々が外で激怒していたのである。だが、この哀れな男にどのような結末が訪れたかは、教会にある絵が余すところなく伝えている¹⁶。その絵は、向こう見ずな者への戒めとなるように、哀れな男が両手を切断されて激しい炎に閉じこめられた姿を描き出しているのだ。

『聖帯への祈りによって重い病から救われた、ある貴族の女について』。

だが、生まれ、財産、境遇の恵まれたベアトリーチェという貴族の女が現われた。重く不可解な病が胸を苦しめ、痛みが死へと追いやる間、医者たちは彼らの能力をもっても治癒することができなかった。そのため、彼女はあなたへ、聖帯へと祈りを捧げた。そして、素晴らしい輝きに彩られた上衣を、高貴な保護として偉大な女王に捧げた。彼女がヴェールを捧げるとすぐに（奇蹟！）健康を取り戻し、重い病は軽くなった。この燃えるように赤いヴェールは、美しいとは言えないが、帯との接触により神聖なものとなったヴェールと取り替えられた。神の帯はこのヴェールに包まれていたのだ。これは、かつてプラート人のミケーレに高貴な持参金として帯が与えられた時に、帯を包んで運んだヴェールだと多くの人々が信じていた。その後、ヴェールはいくつもの断片に切り分けられ、多くの人々に奇蹟を現わし、救いをもたらした。これは以前に起きた出来事だが、神の母とその聖遺物への信仰は今なお続いている。

『悪魔に苦しめられていたが、聖帯の恩寵によって解放された人々について』。

強力な悪魔に苦しめられている人々が、帯が顕示される日を心待ちにしていることは知られている。その日が近づくにつれ、彼らはまず手足を激しく揺り動かし、歯ぎしりし、口を内へ外へと大きく開け、大声を上げて泣きながら胸を叩いて苦しんだ。だが、聖帯が顕示されている間に、邪悪な魂が帯に促されて、そこから逃げて消えた。帯が悪霊を追い出し、帯

と触れた物は彼らにとって嫌うべきものとなるのだ。他にもさらに多くの古い奇蹟があるのだが、我々の時代に起きたばかりの奇蹟もある。

『聖帯を包んでいたヴェールの断片の力で、ある家とその住人を困らせていた邪悪な魂から解放された家について』。

南の方へまっすぐに伸びる通りの、プラートの教会から 100 パスス¹⁷ほど離れた所にある住民の住む家がある。ある魂が恐い声を立てながら恐るべき方法でその家に入り、家のあらゆる部分を揺り動かし、腐敗物や石や煉瓦をめちゃくちゃに家に投げ込み、家の中の物を動かし、下にあったものを上へ置き、そこに居る者のことをあざ笑い、大声を立てて声高に笑った。こうしたことを夜も昼も続け、ある時はかまどで熱した石を、ある時は小さな大理石片を持ちこんだ。そこに住む者たちは、魂がはっきりとした声を立て、脅しと辛辣さを織り交ぜて叫び続けるのを聞いて、激しい狂気に呆然とし、この場所に居ることにもはや絶望した。彼らだけでなく、近所の者たちも同じように感じながらその出来事に立ち会い、恐怖に震えた。

『上述の家の中の物に縫いつけることでそれらを邪悪な魂から守った、聖ヨハネによる福音書の奇蹟的な力について』。

邪悪な魂は物を動かしながら被害を与え、人々が夜に寝台に横たわっている間に彼らの衣服を奪い取って裸にしたので、人々は以下の有益な方策を思いついた。聖ヨハネの福音書を置き、その書物を彼らの物に近づけたのである。それ以降、邪悪な魂が物に触れることはなかった。神の意志で地上にもたらされた力は数多く存在するのだ。

『家の話に戻す』。

司祭たちはしばしば詩篇と連禱と歌で事件に介入するのだが、聖水がなかった。邪悪な魂は嘲笑しながら全員に大声で言った。「この中には、私を遠ざけることができる者はいない」。彼はここには書ききれないほど多くのことを話し、多くのことを行なった。実際、彼の行なったことを語ると長い話になってしまう。ある聖堂参事会員はこの事件が何か月も続いたと聞いたので、その家を救うために立ち上がり、私の詩の前の方で唱った、切り取られたヴェールの断片を持って中へ入った。彼が扉に触れるとすぐに、邪悪な魂が「なんたることだ！どこへ逃げるべきか？」と叫んで周囲の空気を響かせた。そして、二度と戻って来なかった。聖なる帯よ、あなたが包まれていたヴェールの断片によってこの家は取り戻されたのだ。

『出産できずにいた時に、聖帯に触れている糸の力によって救われたカラブリア公夫人について』。

裕福なフィレンツェがルッカ人と有能なルッカ公カストルッチョと対立しながらカラブリア公に統治を委ねていた時期に¹⁸、カラブリア公と公妃がトスカーナ地方を訪れた。彼らの家柄と財産は慎ましかったが、マルスの恩恵によって有名になった。公妃は懐胎しており、

臨月を迎えていた。夫婦は2人とも出産を喜びながら待っていた。出産の 때가近づくと痛みを感じ、その状態が続いたが出産には至らなかった。産婦は叫んだが、子宮は子を産み出さず、痛みは2日間も続いた。命に絶望しながらも聖帯に誓願を述べ、帯のご加護が命を救って下さるように、帯に触れている物を持って来るよう頼んだ。すると、神の母の帯と触れている新しい絹糸がプラートから彼女の元へと引いて来られた。その糸が産室の扉に達すると、彼女はすぐに助力が伝わってくるのを感じ、力を取り戻した。そして、彼女の要望で、使者の女性が糸を手渡した。彼女は糸を受け取り、出産した。赤子を産むと、民の間に、そして涙でぬれていた家中に喜びが広がった。

『カラブリア公妃は、出産時に手渡された糸の力で起きた恵みについてどのようにプラート人たちへ書き送ったか。そして、多くの妊産婦が、出産時に、聖帯に触れている物によっていかにして助けられたか』。

だが、このような神の贈物は雲の下に隠されるべきではなかったもので、公妃はラテン語ではなく、ガリア語のように響く言葉の手紙によってプラートの民に感謝の意を表し、この出来事について知らせた。彼女のように、そして聖帯に触れた帯を役立てた多くの妊産婦のように、可能であれば女たちはこのような物あるいは似たような物を身につけ、そのことを記憶に留めておくことを勧めておく。出産を恐れる者たちは、信仰が伴いさえすれば必ず助力を得られることだろう。

『聖帯に触れた物によって与えられた様々な助力について。どのように信心深く保管されるべきであったか。そして、その聖遺物を不信心な方法で保管した者に起きた奇蹟について』。

この聖遺物は妊産婦を元気づけるだけでなく、性別を問わず、あなた方あるいは男たちにも非常に役立った。それを持つにふさわしく、慎み深く罪を犯さずに運べば、戦争では防御となる。確かに聖帯と触れた物を、放埒な生活を続けながらひどく敬意を払わずに運んだ者たちが、かつて私に知らせたようにではなく。だが、それは閉じた布袋から逃げ出した。この出来事に遭遇した者たちが、私にそう主張したのである。奴らから逃げ出した物は何だったのかと問うならば、前述のヴェールの小さな断片であったと言っておこう。それ故、神の聖なる遺物が罪の過ちにより奇蹟の力を分かち合うことを拒まないということ、どれくらいの恐怖をもって畏れるべきなのだろう！ このことを来たるべき死のしるしとして見ない者は、魂のないままに生きる。だが、女と男よ、帯を信心深く丁寧に敬意をもって運べば、あなた方の助けとなるのである。帯は暴力を抑制し、邪悪な魂の襲撃はもちろん魔術を取り除き、多くの悪を斥け、出産時のような腹痛の苦しみに救いをもたらすのだ。性別にかかわらず、それを経験した者が証言しているのである。たとえ肉体を死から常には救わないとしても 誰にとっても肉体の腐敗は定めなのだから 少なくとも悪しき魂が魂を連れ去らないようにする、移りゆく魂への強力な保護となる。死に際して精神が確かな神の聖寵を得て、そのことで人間は安らかに命を終えるのだから。

『聖帯が触れた物が臨終に際してどれほど大きな助力を与えたかを死後に明らかにした、枢機卿ニコロ・ダ・プラートの孫のステファノについて』。

この後に続く詩句は、読者よ、あなたの心に確信を与えると断言しよう。ある恵み深い婦人が、モンテカティーノの激しい戦闘¹⁹で命を落とした息子のことで泣いていた。彼女は、プラートの枢機卿の大切な姉妹だった。枢機卿はオスティアとヴェレットリの司教職についていたが、それよりもさらに立派な肩書きを持っていたという。彼の名はニコロといい、これは「民の称賛」を意味した。その姉妹のインジェンテ自身は、ジェンテと呼ばれていた。その息子の名はステファノといったが、生まれながらの身分よりも徳性において優れていた。だが、彼は、精神の尊さによって自分の家柄と祖先を越えることに満足を覚えていた。2つの対立する党派²⁰が戦いに至ると、この有能な男は、戦場と戦闘の最初の段階で攻撃にあたる兵士の数の少なさについて要求を出した。兵士は補充されたが、その後、彼は命を落としてしまった。不幸な者の希望を打ち倒してしまう死の犠牲という運命がどんなに苛酷なものであるかを、彼はこのようにして経験したのである。彼の党派は戦闘に勝利したが、息子を愛する母親は彼の死をしばしば嘆いた。だが、有力者たちの虐殺から彼の遺体を取り戻されず、墓にきちんと埋葬されなかったからではない（有力者たちの遺体は、野獣に引き裂かれるようにと墓に埋葬されずに放置された）。大胆すぎた、正義というより党派の重荷を負わされた精神を息子が持っていたように思われたので、彼の魂が重い罰を受けるのではないかと嘆いたのである。しかし、悲嘆したからといって、貧しい者、未亡人、卑しい人々に豊かな施しを与えることをやめ、心を曇らせることはなかった。そうした施しを続けることで、時の経過と共に息子を贖うことができるようにと望んだのである。兄弟の財産を使ったので、彼女はこうしたことができた。だが、常に善行を望んでいた息子は、母の悲しみを鎮めたいと考えた。そこで、神の許しを得て、不屈の人生と名声で信頼を得たある霊的な修道士の前に現われ、そばに立って言った。「私への悲しみを和らげるようにと母に伝えて欲しい。それというのも、私は神のお慈悲によって救われる定めなので、神の祝福された御許へ早く行けるのを待っているのだ。なぜかという、死が私のほほを包んだ時、光り輝く天使が私の死を打ち負かし、改悛への努力のために私の魂を楽にし、神の母の名を口に刻みつけたからである。この偉大な恵みは、プラートの崇拜されるべき聖帯への信仰のお陰で私にもたらされた。死にゆく私はそれに触れた物を持っており、そのせいで邪悪な魂が驚愕したのである』。母はこの言葉を深く感動しながら聞いて、心に喜びを取り戻し、もはや嘆くことはなかった。聖帯よ、あなたが彼女を慰めたことは、何と価値あることだろう！ 彼女はあなたへの信心を持つようになり、美しい贈物を捧げた。

『聖帯の記憶はどのようにして人々を水難から救ったか』。

物語はさらに、この私の詩の中でも触れておきたいある注目すべき恩寵について語る。河や大海で嵐がうなっている時に聖帯を思い出す者は、誰であれ無事に過ごせる。聖帯の記憶がある者は水に飲み込まれず、水のせいで死を味わうこともない。

『聖帯の記憶と信仰の力で嵐から救われた、イゾッタの子マッテオの奇蹟について』。

この辺のことにについては、難破の原因となる大洋や流れの速い河に押し流されて死に至りそうになった人々を聖帯が保護し、多くの重要な奇蹟を行った。だが、恩寵が与えられたことで知られる、マッテオ・ディ・イゾッタという名の者については語っておこう。彼は、他のプラート人の仲間と生きていくことを嫌ったので、海に住んで、船乗りたちと気ままに放浪するという自分の力に合った生活を送っていた。海で働く者は、海の危険がどのようなもので、どのくらいのものなのかを語る事ができた。それは、彼らが海に耐えていたからである。ある時、船がマヨルカへ向かっていると、航路の半ばにある時に、あちらこちらから生じた荒々しい風が吹き、彼の帆船を破壊した。突然、暴風が高い帆柱と帆を船から引きちぎり、帆のロープは帆をつなぎ留めておくことができなかつた。波は海を荒げ、高い山のように盛り上がった。ある時は天に、ある時は海底に達した。舵手は絶望し、仲間も絶望し、船乗りたちは操船術に頼れずに混乱した。死が恐怖をもたらしたので、恐ろしさに震えた人々はあらゆる聖者に助けを求めた。マッテオのみが、恵み多き帯の聖遺物に救いを求め、心から哀願してキリストの母に祈った。荒れ狂う海で死なないように、死からの救済という保護を与えて下さるならば、できるだけ早く肩をはだけて徒歩でプラートへ、そして聖帯を納めた祭壇へと行き、記憶に残るような素晴らしい物つまり最初に見つけた魚の骨を寄進すると約束した。マッテオが敬虔な心で誓いをたてると、すぐに海に風が訪れた。半ば沈みかけ、揺れながら波間を漂い、長い間音を立てていた船は、キリストの母が望まれたので、人間ではなく天の御業によって止まり、甲板は天の輝きで煌めいた。すると、船乗りたちの心に希望が蘇り、喜びで元気を奮い起こしながら持ち場に戻った。マッテオは信心深い人々に【この出来事を】思い起こさせるために、船乗りたちと一緒に誓願を成就した。鯨の骨の中でも誰も見たことがないほど大きな骨が、その有徳の者が寄進した教会に吊されている。忘れやすい人間の精神が彼のことを覚えているように、神は私達に非常に厳しい試練をしばしば受けさせる。聖なる誓約は神の心を動かすのが常であるから、激しい暴風にさらされたあなた方は絶望するべきではないのだ。プラートの地で、ある若者を熱い炎で焙るという判決が出された。彼は聖ヤコブへの誓願によって無傷で炎から出たが、火刑場で再びつけられた炎も彼を傷つけることはなかつた。

『栄誉ある帯を見るために集まった大勢の民の上に落下したが、誰も傷つけなかつたという大きな鐘の舌についての奇蹟』。

別の種類の驚くべき出来事について語ろう。その出来事を記憶している大勢の人々は今も啞然としており、自分の目で見た者もまた信じられないでいる。神でなければ誰もこれを為し得ないのだ。聖帯の顕示の職務にある者たちが帯を上から顕示し、人々が聖帯を見るために広場へと急いだ。小麦が穂一杯につくように、天からの雨がやつのことで地表に届くように、まかれた種子がすぐには大地にもぐらないように、広場が人々で一杯になった。すると、見よ、どの鐘楼よりも大きくて高くそびえる鐘が、いつものように大きな力で打ち鳴らされ、人々のそばに建つ鐘楼の中で揺れ動いた。顕示の場所は現在は教会の角であるが、当

時はここだったのである²¹。突然、鐘楼から大きく恐ろしい鐘の舌がはずれ、密集した群衆の真ん中に落ちたのだが誰も傷つけなかった。あたかもある意識がそれを動かして、「キリストと共に天上で支配する神の母の非常に高貴な聖遺物が顕示されている間は、傷つけない」と言ったかのようにだった。鐘の舌は固い地面にぶつかり、大地に突き刺さって半分まで埋まった。だが、それが突き刺さって大地が震える前の、舌が落ちてくる瞬間には、誰もその状況をきちんと理解していなかった。キリストよ、それからあなたへの感謝と称賛と歓呼を投げかける叫びが民衆の間に満ちあふれた。ああ、毎年2度、無数の人々を迎える有名な広場はあまりに恵まれ、喜ばしい。そこでは、聖帯が顕示される時に各々が無言でキリストの母への祈願を表明するのだ！ だが、おお、パンフォッリアよ²²、君の高い邸宅と、庭と2基の塔を備えた囲地は今は広場になっているが、かつてそこを占有していた君は聖母への称賛と祈りを思い出しはしなかったのか？ 財産は君のどのような役に立つのか？ 広大な地所や、当時は君が馬の蹄鉄にしていたという銀は、どのような役に立つと言うのか？ 専制君主よりも狡猾な君がプラートの民に与えようとした自由は、君のどんな役に立つというのか？ 君の死に際してエトナ山の下で「パンフォッリアが来る。火に薪をくべろ！」という雷のような声が轟いたと、噂が伝えている。だから、財産を多く持つ者は、【地獄の】炎が裕福さと相反するものでは決してないということに気づくべきである。

『最近の奇蹟の後に、聖帯の歴史と古い奇蹟が簡潔に語られる。この短い作品の後半部である』。

聖帯の伝説、聖帯の到着、形状、誰にどこで与えられたのか、どのようなしるしによって最初に私達に知られたのかを知りたいと願う者は、その物語を受け入れる精神がいっそう歓迎するように、その歴史をごく短い内容にまとめた簡潔な詩によって手短かに知ることだろう。個々に歌うことで歴史がその価値を減じないように、私の詩の中では細かいことまでは語らないつもりだ。聖なる信仰が我々を救って下さるように、救済の始まりは神の霊的な出来事を信じることである。理屈ではそれを証明できないが、我々の理性から逃れたより高い意志だけが証明できるのだ。同様に、聖帯についても、父なる神の意志が定められたことを不断に信じるべきなのである。

『どこで、いつ、どのような理由で帯が使徒聖トマスに渡されたのか。栄光ある聖母マリアの死に際して起きた出来事。そして、彼女がどのように天に上げられたか』。

キリストの母の葬儀について書物²³に書かれている内容に誰も疑念を抱かなかったので、教会もそのように理解していた。すなわち、天使が彼女の死の日を前もって告げ、輝く葉のついたしゅろの枝を持ってきた後に、世界中に散っていた使徒たちの一団が雲により運ばれ、【神の】母の家に集められた。ハバククが神の意志により多くの王国を通して運ばれて、牢獄に閉じこめられていたダニエルに食物を与えた時のように²⁴。まず、聖母の後見を委ねられたヨハネが到着し、それから神の残りの弟子たちが続いた。彼らが来ると、彼女は自らの死について告げ、すべきことを命じ、忠告した。彼らは急いで彼女の言葉を聞き、命じられ

たことを引き受け、全員が交互に喜び合った。その間に、天の輝きに囲まれたキリストが天使の喝采の中で母と一つになった。そして、神が母の魂を腕に抱き上げて使徒たちの視界から消えると、すぐにヨシャファトの谷の大理石の新しい墓が、聖なる母の亡骸を受け入れた。聖なる遺骸を奪い取ろうと考えていた悪しき人々の不吉な企てのこと、あるいは棺を運ぶために最も迅速に出発した者に何が起きたかは、私は語らない。だが、使徒たちが恐れていたことについては、神が彼女に命を戻して魂を吹き込み、身体とその魂を天の高い所へと運んだ【ので、恐れていたことは起きなかった】。

『聖母が天に昇った時に到着した聖トマスに、栄光ある聖母マリアはどのように高貴な帯をお渡しになったか。そして彼の足下で、どのように地面が小さな山のように盛り上がったか』。

インドから運ばれてきて遅れて到着したトマスは、天に達しようとしている聖母を目撃し、彼女に尋ねた。彼女が生きたまま天に昇られたことを彼が仲間に話すように、霊的な奇蹟によって遅れて運ばれたのである。彼が証拠となる贈物を求めると、彼女は帯を解いてそれをディディモ【トマス】に渡した。その場所がこの出来事の証拠となるように、彼の足下の平らな地面が、小さな山のように高く盛り上がった（人々がそこを通った時にその奇蹟が起きたと噂は伝えており、称賛に値する敬虔な人々も同じように語っている）。現在、そこはステファノが斬首されて没した場所の後ろに位置する。トマスは使徒たちの集団に入り、彼らが図らずも嘆いているのを見て、なぜ悲嘆に暮れているのかと尋ねた。彼らは先程キリストの母を埋葬したと話し、なぜ遅れて来たのかと彼を非難した。

『聖トマスがどのように聖母マリアが生きたまま天にお昇りになったかを話し、被昇天のしるしとして与えられた帯を他の使徒たちに見せたか』。

だが、彼は多くのことを語った後に聖母について話した。「生きておられて、ご無事な身体で天に昇られた」。そして、天使の集団に囲まれた彼女を見たとき述べ、彼女の手から与えられた贈物を見せた。彼らは与えられた帯を調べ、すぐに彼女の墓をもう一度見に行こうと考えた。すると、からになった墓がマナで一杯になっているのを見つけた²⁵。平らな縁の所には山ができていた。それから、この信心深い一団は別れ別れになっていった。敬虔で信仰の篤いヨセフ²⁶が簡潔に語っているように、一人一人が雲に運ばれて元の場所へと向かって行った。私が考え、間違っていないのと同じように、全カトリック教徒もヨセフの著作を是認している。なぜならそれは絵画に多くの題材を提供しており、教会はそれを今まで禁じてこなかったからである。

『前述の出来事を裏付けるために、聖母マリアの被昇天が世界中でどのように描かれているか』。

それ故、昇天するキリストの母を表現した絵があり、彼女の祝日は各地で祝われている。その絵は、中央の玉座に座って天上の雲に囲まれて天に昇る聖母、そのまわりに彼女を運ぶ天使の一群、しるしを求めて懇願する聖トマス、そして彼に上から帯を渡す聖母を表わして

いる。読者よ、あなたはどこの町でもこのように描かれているのを見るだろう。

『聖帯の形状と材質と色について』

聖帯は3ブラッチャ²⁷の長さで、中央の部分が幅広く、堅くなっている。だが、2つの部分つまり2つの先端が両端で対になっており、この2つの部分のそれぞれが等しく分かれている。それらの紐に、聖母はドングリ型の結び目を手でお作りになった。帯の材質は絹で、光輝く金が散らしてある。そして、色を持たないある種の色をしていて、時には様々な色に、時にはどんな名でも知られない色に見える。だが、ヒースの花、あるいは沢山の小さな円のついたミドリトカゲの背中を描く時の淡い草色に似ている。

『ヨシャファトの谷に建設されるべき教会に寄進するために、聖トマスは、彼と他の使徒たちを泊めた者にどのように帯を渡して保管させたか』

神の聖なる母が埋葬されたヨシャファトの谷にいずれ建てられるべき教会に帯を寄進するために、使徒たちの一団を泊めたある敬虔な者がトマスから帯を受け取った。彼は帯を安全に保管するよう息子に託し、その息子もまた子孫へと託した。だが、ユダヤ人を恐れて、教会は未だに建設されていない。そして、聖帯はある司祭の手に渡った。彼には妻があり、マリアという名の美しい一人娘がいた。彼女は後にプラート人のミケーレと愛情という絆で結ばれることになる。

『聖帯は、持参金としてそれを受け取ったプラート人のミケーレによって、どのようにプラートへ持ち込まれたか』

プラートがこの贈物をどのように受け取ったかを、歴史に従って、我々の詩が明らかに簡潔に示そう。ミケーレという名のプラートの男は、立派な家柄の生まれでなかったとはいえ服装と体型に気品があり、神のお気に召すように広い心をもって熱心に努めていた。聖墳墓とイエス自身が立ったすべての場所を訪ねるために、彼はエルサレムへ行った。旅行者たちは様々な理由でそこに留まることがあった。だが、伝えられているように、ミケーレはエルサレムに滞在している間に美しい娘と結婚という絆で結ばれ、愛のためにそこに留まった。彼女は、先祖から受け継いだ帯を保管していた司祭の娘であった。だが、今は帯の保管に関知しているのは母親だった。時が流れ、ミケーレが妻を連れてプラートに帰りたいと望むと、姑は次のように話した。「【あなたたちの結婚は】完全に合法的です。あなたは彼女から愛されているのだから。彼女はあなたのために私を残して行こうと望んでおり、そのことが私の子宮をひどく苦しめます。あなたが同じくらいの愛情をもって彼女を愛してくれていることだけが慰めです。あなた方は聖なる婚礼の床により結ばれたのだから、同じ精神をもって一緒に生きていくのがよいでしょう。あなた方が常にそのように生きていけるように、贅沢な量の金をしのぐほどの、真実の愛を保護してくれる高貴な贈物をあげましょう。これを大切に保管しなさい。極めて高貴な物なのだから」。こう言うと、かつては父が施錠して保管していたのだが、今は書棚の下の方にきちんと置いてある聖母の帯を彼らに与えて言った。

「これをあげることは父親は知りませんが、あなたへの持参金です。これは父親の家系の遺産でした。」そして、祖先たちの名を挙げていった。「それ故に、娘と婿よ、大切に保管しなさい」。こう言うと、婿はすぐに答えてその贈物を受け取り、娘にとって好ましいことをすべて行くと誓った。感謝の意を伝えてそこから出発し、妻と贈物を伴って船に乗った。風は彼らを順調に前進させた。そして、プラートに戻ると敬虔な用心深さをもって帯を保管し、自分の家で何年もそれを崇拜した。彼は死期が近づくと、帯を持ってプラートへ戻って以降それを保管している間に注意深く見守る彼に対して帯の力で起きた一つ一つの出来事を告げ、帯をプラートの教会へゆだねた。こうしたことに加え、歴史が広く記録しているこのような出来事については話すのを控えておこう。

『どのような奇蹟によって、聖帯がプラート人と他の民に初めて知られるようになったか』。

帯がその教会とその場所の司祭長に渡された後、彼らはすぐには信じず、それに相応しい崇拜を行わなかったため、神の贈物を公に知らせることになったいくつかの奇蹟について触れておこう。考えているよりも話が長くなるかもしれないので、すべての奇蹟ではなく、いくつかについてだけ詳しく述べよう。

『聖帯を香部屋に移した後、夜になってどのように嵐が起きたか』。

このような奇蹟の中でもまず、香部屋係たちを苦しめる嵐が起きた。これは、聖帯が香部屋で価値のない物と一緒に置かれることを拒んだためである。香部屋で保管するよう彼らに委ねられると、帯は聖具と書物を破壊し、人々を苦しめ、恐れさせた。香部屋係たちは帯が疑わしいと考えて、後で語るように、帯をさらに遠い場所に移そうと考えた。

『聖帯が運び込まれた後に焼失したように見えた、教会の庭に建つ家について。その奇蹟により、帯は祭壇に移された』。

続きは、聖堂参事会員が休息するための庭に建っている家で起きた。すべての家財が運び出されるまでの間、火災の荒れ狂う炎が、開け放たれたその家を取り巻いているように見えた。聖帯を移動させるとすぐに炎は静まったが、敬虔な人々が恐れていたような火災の結末は見られなかった。荒れ狂った炎は、火災の痕跡を全く残さずに偉大な栄光の成果を帯のために初めてもたらしたのである。それ故に、プラートの守護者である聖ステファノよ、帯はあなたの聖堂に初めて寄進され、他の聖遺物と一緒に置かれたのである。帯は、聖母の敬われるべき祭壇に納められた。それは彼女のための場所だったので、帯を保管するのに相応しい場所だった。

『悪魔から解放されたプラート人のゲアルドラダについて』。

それから、悪魔に取り憑かれていたゲアルドラダというプラートの女が、この聖遺物の力によって初めて治癒という恩恵を受けた。だが、この奇蹟が起きても、人々は【聖帯を】すぐに信じようとはしなかった。

『悪魔から解放された少年の奇蹟によって、聖帯がどのようにフィレンツェの町で初めて知られるようになったか』。

さらに、フィレンツェよ、聖帯は神の御業により、悪魔に憑かれた少年の口を通じてあなたの民に初めて知られることとなった。この少年は、プラートの人々が恐怖のためにあるいは強情だったために敢えて声を上げようとしたとも述べた。聖帯に近づくことで苦痛を取り除くために、少年は信心深い両親と多くの同行者の手でプラートへ連れて来られ、聖帯の力で【悪魔から】解放された。しかしながら、その少年が話した多くのことについてはムーサは語らない。それを語るができるのは悪魔の詩だけだろう。

『アルプスの向こうから来た何人かの女と、悪魔から解放された多くの女たちについて』。

その当時、アルプスの向こうから女たちがプラートに急ぎ集まった。そして、彼女たちは粗野な訛りのあるラテン語で、悪魔が自分たちの意志に反して言いたくないことを告白するよう神が命じたと話した。まず、善良な魂にとって好ましい多くのことを明らかにすると、それは俗人と聖職者たちの心を捕らえた。そして、聖母マリアが望んでおられるので、帯が聖母の信仰者たちに知られるように、彼らがその前から逃げようとしているこの帯の非常に素晴らしい恩恵のことを話した。中でも、この帯のことを覚えている者は、海の危険から助かるということ話を話した。当時、帯はその名声が民の間に伝わるまで、悪魔に取り憑かれた多くの人々を救ったのである。非常に荣誉ある短い歴史がそうした他の多くの同様の出来事を語っている。

『栄光ある聖帯に対して抱くべき信仰について、この聖遺物に懐疑的な裁判官パオロに起きたことについての第3部が始まる』。

しかし、帯が考えられているようなものであることに誰も疑いを持たないように、一つ一つのことを注意深く書き留めておくべきである。【民法と教会法の】両方の法によく通じた、ヴァルダルノのフィリネ出身の、世俗の豊かな財を持ち、賢明で狡猾で勤勉で、訴訟事件を得意とする裁判官だったパオロという男がいた。9月の聖帯が顕示される日²⁸に彼はプラートにいた。だが、帯は崇拜に値しないのではないかという疑念が不意に心に湧いたので、多くの疑いをでっち上げた。この疑いを会話の中で言いふらし、機会がある度に不適当なやり方で帯について厳しく語った。つまり、帯が話題にのぼっている時に、嫌みや皮肉たっぷりな会話に加わったのである。だがある夜、夜明かししながらこのことについて深く考えていると、耳元で怒鳴る声を聞いた。それは男の声ではなく、このように言う声だった。「パオロよ、なぜそのことを疑うのか？ お前の精神は何を気に病んでいるのか？ 疑う限り、お前は間違っているのだ。あれは本当に、聖母が空に昇りながら、ご自分が生きておられることを使徒たちが知るようにと善良なトマスにしるしとしてお渡しになった神の母の聖なる帯なのだ』。確かにそう言うときすぐに空気が震えたので、彼は恐怖に襲われ、寝台の上で動揺し、驚愕のあまり死ぬのではないかと恐れた。夜が明けるとすぐに起きて、この聖遺物についてそれまで敢えて偽ったり冒瀆したりして話してきた人々に対し、この奇蹟を誓って明ら

かにするために急いだ。そして、彼自身は最初は誤解していたので、天からの贈物に対する罪を明らかに語り、涙を流し、人々がそれを信じて本当のことだと認めるまで証言を続けた。帯によって榮譽を受けた付近の大勢の人々は、言葉だけでなく振る舞いにおいてもそれを崇拜したので、プラートのみならずトスカーナ全体がその聖遺物によって名誉と称賛を得たのである。

『聖帯はどのように天の贈物であるというはっきりとしたしるしを示したか。そして、愛と信仰をもってどのように聖帯を拝謁し、訪ねなければならないか』。

あなたは聖帯が神のものであり、本当に崇拜すべき物であるかどうかを知りたいのか？ そのしるしを気を付けて見よ。人々が毎年あらゆる場所から急いでやって来て、そうすることに飽きないのを見よ。帯を見に来る者のうち、どれくらいの人が罪人のままでいるだろうか？ 彼らはキリストの偉大な贈物によって狂喜し、朗らかになり、励まされた気持ちで帰るのだ。天のしるしが存在する中で、称賛された手で与えられた天の贈物が世界のどこかにある中で、より偉大でより高貴なしるしが他に見つかるといえるのか？ 神の母が身体の重みをもったまま天に君臨しておられることを、聖帯というしるしが伝えて思い出させるのだから。彼女は身体の重みは感じておられず、軽く感じておられることだろう。だから、世界が保有する崇拜に値する財の中で、この聖遺物はヴェロニカ²⁹の次にくると私は考える。聖母の祈りのために来た者に対し、神自身が数々の贖宥をお与えになることは疑いない。しかも、聖帯は正直に罪を告白した者になお有用であるが、告白しない者にも多くの恩恵を降らすのだ。

『この栄光ある帯は、どのように教皇の特権で認可されたか』。

これが神の母の帯であることを認める教皇の文書が存在し、この場所に保管されているのだから、すべての人に公になれ。そして、それ故に、帯が祝われる祝日にここへ来るすべての者に、教皇の文書によって全贖宥の恩寵が許されるのである³⁰。だから読者よ、聖帯について教会が了解していることと、教皇答書によって敬虔で奇蹟的な出来事が是認され、真実を語る名声が認められているということ、純粋な心で堅く信じるべきである。そう信じれば、あなたは地上と天の高所で神の母と御加護を分かち合うことだろう。

『学生たちへの小冊子の結語』

この主題について記すべきことはまだ多く残っている。だが、短かめに書く方が好まれるので、あなたや学生や若者たちが容易に理解するためにはこのくらいの簡潔さで十分だろう。キリストについての全著作を誰が知ることができようか？ そして、勉強という料理が、たとえそれに大いなる名声を与える多くの美味さをもたらしたとしても、この小冊子はあたたかもお気に入り料理の後の果物のように軽く口直しをさせる最高の味となるだろう。聖母のためのこの作品を彼女が気に入って下さるよう敬虔な祈りによって絶えず懇願しながら、ここで筆の歩みを止めよう。それでは祈ろうではないか。「父なる神よ、気高き聖霊よ、聖母の

胎より生まれた神キリストよ、あなた方が三つの等しいのペルソナであり、本性が共通し、一つの等しい神性である時、あなた方は同じ三位一体、唯一の神と三つではない神性、すべての被創造物を同時に動かす唯一の意志なのである。そして、あなたは肉体から解き放たれた魂を永遠に救済なさり、信仰の精神がその魂を地上からあなたの御許に導く。そのために教会は生きることの真の規準、パン、人生、救済、指標、道、心の糧となるのだ。常に熟慮なさっておられる全世界の支配者よ、我々罪人を助け、憐れみたまえ。あなたは慈悲深い。天国の門が聖母マリアと共におられるあなたを考慮して、我々すべてに恩寵を下さいますように。」

『プラートの聖堂の聖母マリア同信会に対する小冊子の推薦』

プラートの敬虔な兄弟たちよ、これがいつまでも聖母の帯と神の同信会員の書物だと言われるように、我々の書が詩の形式の聖母賛美によってあなた方にもたらす花々を、そして、これらの奇蹟を見るあるいは伝承によって知る者たちの精神から着想を得た花々を摘みたまえ。

『著者の弁明』

だが、弦は望むような音色を常には鳴らしてくれないものであるから、相応に鳴らない弦があったとしても、自分の能力で真実を書き記そうと努めた者の資質と熱意を咎めないでくれ。人々が天からの贈物への信仰に関心を持つことを私は切に願う。聖母の帯のために行われたことをあなた方が同信会としてきちんと続けていくなれば、疑いなくそれは行われるだろう。だが、大いなる努力によりこの贈物をもたらしたミケーレのことも記憶から消してはならない。彼が今は天で恵まれて過ごしているということを疑う不信心者もいるが、神への徳の優れていたこの男がキリストとその母に迎え入れられたことを我々は信じているのだから。大いなる徳という美点があったからこそ、天の聖遺物を受け取り、保管し、運び、寄進した唯一の者として、彼にこのような恩寵が許されたのである。だから、我々が彼を絶え間なく称賛し、彼自身もまた神の御許で我々のために祈ってくれることは、価値あることなのだ。そして、彼女がお渡しになった聖帯を見ようと敬虔な魂が引き寄せたすべての者のために、キリストの母が息子に自分の胸を示しながら祈って下さることは。そして、あらゆる悪からの解放を罪を絶やししながら成就なさり、繁栄をもたらし、すべての者を保護し、彼らをご自分と一緒に慈悲深い星へとお導き下さることは。プラートよ、どんな持参金が、どんな名誉、徳、称賛、栄光がこの聖母の帯によってあなたにもたらされたのか！ あなたはそれを知っているのか、いないのか？ もし知っているなら、偉大な贈物であなたを満たす施与者キリストに感謝せよ。どの町が、神の聖なる母からあなたに与えられたこの有名な贈物によって称賛されないだろうか？ 失われたこれらの徳は、受けるに足りなかったのか？ 祖先たちはもはや、あなたが生む人々とは異なるのだ。天の贈物に恵まれた場所は、私が理性というよりもむしろ情愛で証明するに値した。実際、かつてカミッロがヴェイオに住んでいた頃、ここはローマの領地だった³¹。そして、ヴェイオのワインの名はここに由来する³²。

ここはクリオの鋤で耕された³³ 実り豊かな土地である。宿命によって、不動の祭台がローマの守護者あるいは参事として遇されるだろうということを明らかにした農民出身の執政官は、ここからローマへと連れて行かれたのだ³⁴。だが、その場所は長い間に、時代が記憶にとどめる多くの謙虚な人々を産み出した。私の詩歌は帯のために調律されており、この伝説は短い詩の中で神の母に最大限の感謝を表して結ばれるのであるから、こうした人々の名を挙げていくことは難儀で長々とした主題となってしまう。それ故に、キリスト誕生の年 1340 年にこの作品に着手して書き続けた。読者たちよ、この作品について私は願う。私に詩で語ることをお許しになった、御言葉からお生まれになった御子を讃えよ。

『神と栄光ある聖母マリアを称えて、慎ましい文法教師であるプラートのドゥッチオにより記された小さな書『聖帯』は終わる。神に感謝を。アーメン。

この小さな書は主の年 1340 年に、上述の教師ドゥッチオにより書き上げられた。1340』

1340

『サン・タンジェロ・イン・ペスケリアの枢機卿、プラートの堂々たる司祭長であるジョヴァンニ・コロンナ閣下³⁵へのこの小さな書の献呈』。

書よ、急いで語り続けよ。枢機卿という高い榮譽ある、コロンナ家出身のプラートの教会の司祭長であるジョヴァンニ閣下を見つけよ。まずこの方に、私はこの書を献じる。もう彼のものであるとはいえ、私のわずかな力ではこの書は崇高になり得ない。崇拜されるべき聖帯のために、神自身が彼の母の愛によりなされた奇蹟をこの書が明らかにするように、私の力のできる限りのことをまとめた。彼はあなた【=この書】に威厳よりも多くの愛情を示した。あなたの様相が大きな尊厳を備えているのは彼のお陰である。それというのも、あなたの彼に対する愛が、あなたを熱心にさせるからである。私は未熟な著者なので、もし私の配慮が欠点を残していたとしたら、彼がそれを取り除くことを私は願う。なぜ彼があなたを保管するのに最も適しているかという理由を、私が述べずにいることは重要ではない。私が判断するに、彼の称号、愛すべき行状、信仰に満ちた精神、博学な知力、精神の誠実さに百合のような純潔さを備えた肉体の堅い支柱といった特質を挙げることができる。だが、彼は聖母の贈物と彼女の教会に愛を加えようと願っている。そのプラートの教会は、極めて偉大な高位聖職者のお陰で幸運を保ち、高い調子の声で彼に頼っているのだ。これ以上は語らずに終えるが、彼があなたを読む時は、絶えず彼に「閣下よ、ごきげんよう！」とすることを忘れてはならない。

『全能の神と我らが主イエス・キリストの母である聖母マリアの称賛のために、枢機卿にして、極めて立派なプラートの司祭長であるジョヴァンニ・コロンナ閣下の榮譽のために、そして、プラートの教会の聖母同信会の兄弟たちを支援するために、ドゥッチオ・ディ・アマドーレ・ディ・プラート師により詩として起草され、まとめられた聖母マリアの聖帯の歴史は終わる。神に感謝を。アーメン』。

【注】

- 1 論者は、プラートの聖帯崇拜とサント・ステファノ聖堂の14～15世紀の造形作品に関する総括的研究として、博士論文『プラートのサント・ステファノ聖堂における聖帯崇拜と14～15世紀の美術』（平成13年12月、お茶の水女子大学に於いて学位取得）を発表した。プラート史や聖帯崇拜に関する研究史、参考文献については上記の拙論を参照されたい。
- 2 『聖帯の歴史』は、フィレンツェ国立中央図書館所蔵の15世紀のラテン語写本『プラートの聖母マリアの帯の歴史 *Historia Cinguli sanctae Mariae de Prato*』（Magliabechiano XXXVII, 323）の前半部のテキストとほぼ一致すると考えられている。同写本の邦訳は、金原由紀子「原典資料紹介：『プラートの聖母マリアの帯の歴史： *Historia Cinguli sanctae Mariae de Prato*』」、『尚美学園大学芸術情報学部紀要』第2号、2003年、pp. 21-37.
- 3 ドゥッチオ・ディ・アマドーレの『聖帯』は、プラートのロンチョニアーナ図書館の紙の写本（n. 634: S-V-21）の91～117葉に写され、『ラテン詩の聖帯の歴史 *Hystoria della Cinctola in versi latini*』というタイトルが付されている。1984年にC.グラッシが公刊した。Duccio di Amadore, *Il <<Cincturale>>*, Introduzione, testo, traduzione e commento di Cesare Grassi, Prato 1984.
- 4 詩は38の短い章に分けられ、各冒頭部に赤インクでタイトルが挿入されているが、章の前後の文脈や接続詞の不自然さを考慮すると、章分けとタイトルはドゥッチオによるものではない。
- 5 使徒トマスの懐疑のエピソード（ヨハネによる福音書20:24-29）に言及している。
- 6 聖母の誕生の祝日は9月8日。
- 7 ビストイア司教を務めていたバロント・リッカルディ（1294-1348）のこと。
- 8 プラートは内戦の激化により1313年にアンジュー家のナポリ王ロベルトの保護下に入った。ロベルトは1335年に王の代理人として、フィレンツェ人アッチアイウオロ・アッチアイウオリをプラートに置いた。
- 9 サント・ステファノ聖堂が献堂されているタイトル聖者、聖ステファノの祝日（12月26日）と思われる。
- 10 1338年前半にバルトロメオという名のサント・ステファノ聖堂の司祭長が没し、司祭長の座が空位となっていた。
- 11 註8参照。
- 12 プラート人と敵対関係にあったビストイア人のこと。
- 13 聖ステファノはバリサイ人たちの石打ちにより、最初の殉教者となった（使徒言行録7：54-60）。サント・ステファノ聖堂はかつて、聖ステファノの血と骨片のついた石を聖遺物として所有していたことが知られる。G. Bianchini, *op. cit.*, pp. 158-159.
- 14 ゲラルドという名の聖堂参事会員は、1340年以前では、サント・ステファノ聖堂の1181年の記録（a cura di R. Fantappiè, *Le carte della propositura di S. Stefano di Prato, I, 1006-1200*, Firenze 1977, p. 401.）と、1275～1284年の多くの記録に見られる。
- 15 1312年のビストイア人ムシャッティーノの盗難の奇蹟について語っている。
- 16 事件後、画家ベッティーノ・ディ・コルシーノが、コムーネの注文でサント・ステファノ聖堂内の北側側壁にムシャッティーノの盗難の奇蹟を主題とする壁画を制作した。
- 17 100パッサスは約79m。
- 18 フィレンツェは1325年9月にアルトパッショの戦いでピサとルッカの君主カストルッチョ・カストラカー

- 二に敗北すると、ナポリ王のアンジュー家のロベルトに救援を求めた。そのため、ロベルトは息子のカラブリア公カルロをトスカーナに送った。カルロは2番目の妻マルゲリータ・ディ・ヴァロワを連れて、1326年7月30日にフィレンツェに到着した。Duccio di Amadore, *op. cit.*, p. 113, n.261.
- 19 皇帝派の傭兵隊長ウグッチョーネ・デッラ・ファッジウオラが、1315年にモンテカティーニでフィレンツェ軍とトスカーナのゲルフィの軍を破った戦い。
 - 20 「2つの対立する党派」はギベリーニとゲルフィを指す。
 - 21 聖帯の顕示の場所は1336年頃までは聖堂南側の鐘楼の近くだったが、それ以降は聖堂南西部の南側の角に移された。
 - 22 13世紀末頃までサント・ステファノ聖堂の西側に広い邸宅を構えていた、ギベリーニ支持の都市貴族ダゴマリー家のメンバーだと推測される。
 - 23 偽アリマタヤのヨセフの『聖母マリアの帰天について』を指す。
 - 24 ダニエル書6：17-25.
 - 25 マナについては、出エジプト記16：11-36、民数記11：7-9を参照。
 - 26 『聖母マリアの帰天について』を書いたと伝えられるアリマタヤのヨセフを指す。
 - 27 13世紀のプラートの度量衡では1ブラッチャ=約65cm。よって、3ブラッチャ=約195cm。
 - 28 9月8日の聖母の誕生の祝日のこと。
 - 29 ローマのサン・ピエトロ大聖堂が保有する聖遺物、聖顔布を指す。
 - 30 1298年2月14日に教皇特使の枢機卿マッテオ・ダックアスパルタがサント・ステファノ聖堂を訪れた者に100日間の贖宥を許可して以降、教皇勅書によって何度も贖宥が与えられた。
 - 31 グラッシによれば、この一節は、マルクス・アンナエウス・ルカーヌス(n. 39-d. 65)の叙事詩『ファルサリア *Pharsalia*』の一節(*Phars.* 5, 27-31)に変更を加えながら引用している。カミッロは共和制ローマ初期のローマの政治家マルクス・フリウス・カミッルス(d. BC. c. 365)を指す。ヴェイオはローマの北西に位置したエトルリアの都市で、紀元前8世紀から6世紀に栄えた。C. Grassi, *op. cit.*, p.142.
 - 32 ここでドゥッチオがワインの産地として記した"Veianum"「ヴェイオ」は、プラート領内の村ヴァイアーノを指すとグラッシは推測している。*Ibid.*, p. 142.
 - 33 ここの"Curionum passa ligones."という一節も、ルカーヌスの『ファルサリア』からの引用である(*Phars.* 1, 169)。*Ibid.*, p. 143, n. 809.
 - 34 ルカーヌスが農民出自の執政官ルキウス・クインクティウス・キンキンナートス(BC. 5C.)がかつてエトルリアの地であった地域に住んでいたと暗示していることから(*Phars.* 10, 153)、ドゥッチオはこの政治家がプラート出身だったと強引に推測している。
 - 35 枢機卿ジョヴァンニ・コロナナは、1340年にサント・ステファノ聖堂の司祭長に就任した。